

王妃エレアーノールと愛の思想

石井美樹子

なぜ歴史小説という手法を選んだのか

西ヨーロッパ世界は、十三世紀末から十五世紀末にかけて古墳の文芸を復興させ、ひとびとを中世のじつにくかの解放し、人間贊美をたからかに歌ひあげました。後世のひとひとは、この時代を近代へのあけぼのとして讀えてやみません。けれども、「これよりずっとまさしく」このおなじ世界が、すでに人間性復興の時代を経験していたことに注目するひとは少なじよつです。ヨーロッパ史の流れを変え、その地図をこつきに塗りかえたといつてんで、中世史に占めるこの時代、十一世紀の重要性とドラマ性は、後世のルネッサンスの比ではとうていありません。十字軍による大量の民族移動と十字軍国家の形成、「カノッサの屈辱」や「トーマス・ベケットの殉教」に象徴される法王と国王の激烈な争い、中央集権国家の形成、聖ベルナルールや少しのちのフランシスコ会に代表される宗教と修道院の革新運動、大学の誕生と発展、ロマネスク美術からゴシック美術への変移、水力昇降機の開発による産業の機械化とそれに伴つめらまじい経済の伸長、金融・交通網の発達など、この時代のダイナミックな社会の動きが國家間の境界線を引き直させ、ひとの流動をつけながら、人間の生活を変え、新しい思想と哲学をつみだしました。十字

軍の波にのつて地中海沿岸地域に旅をしたひとびとが、古典古代の文明を西ヨーロッパにもたらします。古典古代のおおらかな人間贊美に心をゆだぶられたフランスの神学者アベラールなどの人文主義者たちは堂々と人間宣言をしていました。マリア崇敬の高まりとともに、「呪われた」女性たちにも、一筋の光がみえはじめます。新しい女性観の台頭とともに、ついに男女の愛を歌いあげる芸術家たちが登場します。十一世紀は、女性贊美の歌をうたいあげる南仏のトゥルバドゥールやドイツのミンネシンガー、そして、女性恋愛をややけ愛に殉教する騎士たちを描くロマンスの作家たちにもおおいなる舞台を提供しました。

わたしは、この時代を研究し、描くにあたってこれまでのじの著作とも違ひ、歴史小説といつ道をえらびました。王妃エレアノール（一一二一—一一〇四年）の生涯と彼女の生きた十一世紀をしりべてゆくうち、「エレアノールや彼女をとりまく人物たちが、自分たちの行為の意味や、心のうちをわたしに語りかけてくるようになつました。それを文字に記すことは、どうしても想像という領域にふみこんでゆかなければならなくなつたのです。わたしたちに残された歴史書や年代記のたぐいは、そのほんのりが、隠す必要のない行為を正当化する思想や、文字に記しても恥じぬことのない記録とかであります。しかも、それなりに男性、しかも教会人であり、職業柄、特に女性に触れることがおなつか、興味を持つことさえもやむを得ねば、したがつて性欲と特に女性に嫌悪を示すひとびとによって書かれました。いつまでもなく、十四、五世紀になって市民層が経済的力を得るまで、文書にしてなにかを記すところ行為は、教会にほぼ独占され、文字に限らず、教会だけしか後世に残りつつある文学・文化を創造することができませんでした。したがつて、文書の作者は、たいていは聖職者か修道士であって、いわば時代のリーダー、最高の知識人、教養人でありました。かれらは、保守的な思想の持ち主でしたから、かれらによつて記録された文書は、すべ

て正道をはずれぬ立派なものばかりでした。女性にたゞしても、権力の確立に有効な理論をもちだしては、その権力に有利な思想やモラルで女性たちを評価し、そのモラルに傾倒していなければ、自分たちのモラルを盾に女性を糾弾したりその背徳性をあげたりして、女性の存在を否定したのです。多くの場合かれらは、女性たちを、「妻」、「母」、そして「男の性の快楽のための道具」としてのみ語ります。しかし、現実世界の女性たちは、つねに「三つの機能」おこしまれ、それに満足していたのでしょうか。もつすこし時代がくだけ、十二世紀になれば、女性たちのなまみの声もかすかではあります、が、わたし語りつくる。「これから八百年ほどもまえの十一世紀については、文書から女性の姿は見えず、彼女たちの情熱や魂たまご、なじもわからないのです。歴史と文学のはざまで生きてきたわたしがなすべき」とせ、この時代のひとひと描いた人生や歴史の軌跡の事実をたどしながらせ、わたしの心にかれらが訴えてくる声やかれらの情熱の動きを語りつことであるのではなく、かと細つてなづきました。それにつわば、無謀とは知りつつ、歴史小説といふ分野に挑んでみたのです。

歴史といつ曰大なメカニズムは、ときおり皮肉な働きをするのです。最も力なく最もか弱い人間が、歴史を動かし時代を造る役割になつことがあります。わたしが語りつくる十一世紀も、じつはひとりの女性に動かされました。中世が、女性蔑視の時代であったことを改めてひとはなつてしまふ。「この世も、価値の大きく揺れ動く時代にあつては、ひとは、おのれの価値観、人生観、生きる指針を選びとつてゆかなければなりません。この時代は、またひどが、生きることの意味を激しく問われた時代でもありました。女性の権利はあるが、人間の最低の権利すら確立されていなかつた時代に、国際政治を動かし、文化を推進し、時代の主人公として、激しくも

熱く激烈に生きた女性がいたのです。これは、わたくしにとっては、おおきな驚きでした。

十一世紀といつ時代は、ひとりの女性の生じた影響はいたといつても過言ではありません。時代は、まさに「かよわくも愚かな」と伝統的に蔑視されてきた女性のひとりを中心に動いていました。これが歴史の大逆説でなくてなんでありましたよ。このひとりの女性は、エレアノールです。フランス王ルイ七世の妃となり、のちにイングランド王ヘンリー一世の妃となり、ヨーロッパ史を彩った十字軍の英雄、リチャード獅子心王そして奥地エジヨンの母となつた人物です。王妃エレアノールは、女性の人格がほとんど認められない時代に生を受けました。彼女は、十四歳のときにして、広大と豊かさにおいてフランス王国領の数倍にも相当する領土を相続します。女性にも父や夫の家系と社会的地位を継ぎ、財産を受け継ぐ相続権が認められていましたからです。けれども、時代の慣習と政治の世界の厳しさは女の相続人が、実際には領土を統治することは許しません。莫大な婚資を手にしたエレアノールも、ときをおかずして花嫁となり、夫に財産と地位と身柄をゆだねる運命にありました。その婚資にふさわしく、花婿はフランスの皇太子、未来のフランス王でした。結婚とともに、祖父伝来の領土を治める力と彼女の人格権は夫の手に引きられます。熱狂的な民衆の歓呼の声に迎えられ、少女は夫の国にはいります。この世が女性における最高の名誉と幸福とを、彼女は手にします。しかし、なみの女性がしあわせと感じる人生をおくるのは、エレアノールは賢すぎ、そして美しすぎました。彼女が相続した領土は豊かすぎ、広大すぎました。エレアノールは、領土もとも人格までも夫に動かされるといつ時代通念に激しく抵抗します。彼女は、自分の領土をみずから統治することを望んだのです。自己の人格をみずからの方で形成し、みずからが選んだ運命を歩くことを欲しました。まもなくエレアノールの夫ルイは、フランス王ルイ七世になります。彼女の自立への闘いは、フランスの

運命をまきこしますにはおきません。エレアノールの闘いの相手は一国の王とその王国になります。けれども、彼女はひるみません。彼女は闘います、激しく熱く、そして、ときにはしなやかに。闘いは、夢みがちな南仏まれの明るい少女を力強くたくましい黄金の大鷲(わし)に育てあげてゆきます。だが、大鷲がはばたくには、フランス一国ではすぎたようです。大鷲は広い世界を求めて空たかく飛翔します。海のかなたの豊かな島に舞い降りた大鷲は、海峡をはさんでフランスとイングランドのぶたつの王国にその二つの翼をひらげます。フランス王妃の王冠をぬいだエレアノールは、未来のイングランド王ヘンリーを第一の夫に選びます。彼女の胎からいでたイングランドの子鷲たちの名を年代記の作者たちは、こう記しています。「若ヘンリー王、リチャード獅子心王、坎城王ジョン、マリー・ド・シャンペー、ゴ……」時はめぐるめく流れ、大鷲の巣した二人の夫たちはこの世を去つてゆきます。子鷲たちも、母に負けず激しく生きますが、しかし母とはちがつて時代を足はやに駆けぬけてゆきます。トーマス・ベケット、ジョン・オブ・ソールズベリー、聖ベルナルド、アベラールとエロイーズ、騎士の華ウイリアム・マー・シャル、十字軍の英雄レーモン・ド・ポワチエなど、エレアノールの人生を彩ったこの時代のおもな主人公たちもエレアノールに別れを告げ、世を去つてゆきます。だが、母なる大鷲は生き続けます。けつして王妃としての王冠をぬぐことなく、彼女はヨーロッパの運命を背負つて最後のひと息まで闘い続けます。フォントブロー修道院でしづかに目を閉じたとき、八十一年の星霜が彼女のうえにふりそいでいました。

いつの世も、偉大なる統治者はやむことなく、きまわりますが、エレアノールも例外ではありませんでした。エレアノールは精力的に旅をしました。ロンドン、パリ、ローマ、コンスタンティノープル、アンティオキア、イーハルサレム、ナヴァール王国……いたるといふにエレアノールの足跡があります。十字軍の遠征の帰途、捕虜にな

つたりチャーチ獅子心王を救つべく、莫大な身代金をたずさえて、真冬の大陸を横断してマイエンツに赴いたエレアノールは、七十一歳でした。半世紀にわたるフランス王室とイングランド王室の確執に終止符を打つために、孫娘ブランカの手をひきビレネー山脈を越え、フランス皇太子の手にブランカを花嫁として引き渡したとき、エレアノールは、七十八歳になっていました。でもそこには、島子ジョンがフランス王フィリップと大陸の所領をめぐって戦いにはいったとき、エレアノールは、八十歳でした。それでも、病の身をおいて居住地のポワチエを脱出、ミルボン城にたてこもり、フランス軍に対抗しました。

彼女は激動の時代をその流れとともに生きました。政治と愛と冒險に殉じることが、彼女のよろいびであり、生きる目的でした。この世の愛、それは彼女の人生の主調音です。トゥルバドールの第一人者、ギヨーム九世を祖父とした娘にふさわしく、エレアノールは、芸術を愛し、男性を愛し、人生を愛しました。激しくも詩情ゆたかな彼女の感性は、華麗なる愛の宫廷をイングランドとボワチエに出現させます。この愛の宫廷から、中世の倫理観を根底からゆるがすほど過激な思想が生まれるのである。エレアノールは、恋愛が「無償」の情熱であり、まことの恋愛は姦通なりと、たからかに宣言したのですから。かくの「」とお王妃エレアノールは、愛の詩人たちに強い牽引力をもつていました。当代随一のトゥルバドール、ベルナール・デ・ヴァンタドワールは王妃をこう賛美していました。

私があなたを申しすると、私の気持ちはたかぶり、
田と顔に喜びがみなさい。

私の心の内は、すぐ私の顔にあらわれ、

私は、嵐に舞ひ木の葉のようにひらひらと舞ふ。

の方をあまり深く愛するあまり、

大の男の私は、いじめのよひに無力。

エレアノールへの熱い想いを赤裸々に告白するダイシのある詩人の声に耳をかたむけてみましょ。

ライン川から大海まで

たゞえ、全世界が私のものだとしても

そのすべてを、ひと回り大きてもこゝい。

もし、私が、イングランドの王妃を

この胸に抱くことができれば、

エレアノール「さあどう フランスとイングランドは、二百年にもおよぶ長い確執の時代になりました。」これは、

エレアノールが政略結婚で結ばれたルイ七世を捨て、十一歳したの、イングランドの若き獅子ヘンリーを第一の夫に選んだことに端を発するといわれています。體面のような夫ルイとの結婚はしあわせとはいはず、エレアノールは新しい生き方を求めたのです。エレアノールは、女であるがゆえの呪縛から自由になりたいと願いました。当時

の社会倫理や道徳観がよしとする女の生きかたにそむきました。それにあてはめられたことを拒みました。彼女はおのれの好むことを行い、彼女の理性と情熱がさし示す道を進みました。そのために高い代償をはらわなければならぬこともありましたが。当時の年代記作者や「ゴシップ筋は」、「おそれしげに」、「あるには」、「にくにくしげに」と「ヒレアノールを」、「いつ呼んでいます。」「あはずれ」、「売女」、「姦婦」、「怪物」、「魔女」、「悪魔の子」と、嫉妬、傲慢、色欲・多情、激情、女の悪徳をあらわすあつとあらゆる言葉で、彼女は形容されています。十字軍遠征で捕虜となり、莫大な身代金で買取られたリチャード王とベテランの、ふたりの王の治世を生きたイギリス人は、この子たちの母エレアノールを災いとみなしました。数百年後、シェイクスピアの時代のひととの心からさえ、災としてのヒレアノールのイメージはぬぐいわれてはいません。戯曲『ジョン王』のなかで、シェイクスピアは、エレアノールを「流血の闘争にむかわしめた災厄の女神」と描寫しています。しかし、これは、男の論理をたてまえたとした歴史観から見たエレアノール像でしょ。彼女の魂の領域にまでたちいたって、この時代をみつめなおしたときに、エレアノールは新しい装いでわれわれのまえに立ちあらわれてきます。「一国の王に仕え、九人の子を世におくり、フランスとイングランドの一国にまたがる広大な領土の維持に心血をそそぎ、夫と同じもたちの幸福を願い、イングランドとフランスのみならず、ヨーロッパ世界の平和に心をくだき、華麗なる宮廷文化の華をひらかせ、たえず自分とはなんであるかをみつめながら運命に挑戦し続け、八十二年といつ長く年月を生きぬいた果敢なる女性の生涯を知る」と、むしろひとは人間の偉大さに心つたれるのではないでしょ。か。そして、生きることのすばりしさをあらためて思って知るのではないでしょ。か。

エレアノールがヨーロッパ史に残した長い長い軌跡をたどりながら、わたしは、いつしか彼女の魂の領域にまで

踏み込んでいました。あるじきにはたゆといつ大河の「」とく悠然と流れ、あるじきには怒濤の「」とく時の流れに反抗し、「」とくされた生を燃焼しつくして世を去ったエレアノール。彼女の存在にて、わたしは強い衝撃を受けました。そして、今の世に生きるわたし自身の生き方を激しく問に直していました。歴史上の人物に由来つといふことはありますまいにじれぬことと見てこのひのあいわいのおもいが胸のなかにありました。

つきには、紙面の許すかぎり、エレアノールについて語りながら、彼女が生きた時代を考えていきたいと思します。

エレアノールといえば、アリエノール・ダキテースの娘で思にだされるかたも多いでしょう。エレアノールはいろいろな書物のなかでつづきのよつて紹介されています。「トゥルバドゥールの第一人者 南フランスのアキテーヌ公爵キーローム九世の孫娘 ロマンスの作家フレチアン・ド・トロワのパトロン」として名高いトマロー・ド・シャンペー二世の母。有名なブチ・ロベール田舎事典によれば、「ヘンリーと別れたのわせ、ボワチエの宫廷にひきこもつ、ベルナール・ド・ヴァンタードールをはじめとする芸術家やトゥルバドゥールに囲まれて暮ります」と記されています。芸術は、エレアノールの人生で重要な部分を占めてはいましたが、それがすべてではありませんでした。しかし、トゥルバドゥールの第一人者を祖父として、その祖父の宫廷で大きくなつたところには、エレアノールの人格形成に計り知れない影響をおよぼし、トゥルバドゥールの思想がそのちの彼女の生きかたや人生の指針となつたことはまちがいありません。祖父を語ることなくして、エレアノールの本質に触れるることはできなことでしょう。わたくしも、エレアノールの祖父を語の「」とかば、エレアノール像へちがつてみたことおもいます。

年代記作者は、ギーローム九世のことをして記しています。「世にまれなる雅なひとで、女を驕す手管に最もたけ

た男のひとつ、男女の道には鷹揚、「ありのる破廉恥といひその神聖なるものの敵」、「悪徳のなかにはこつべきもの」。いわらの言葉が証明してごゆるべで、ギヨームは八年のひから女性には異常な情熱を燃やしました。相手は貴婦人でありつゝ、娼婦でありつゝ、はたまた農婦でありつとかまこませんでした。食欲も女めぞつじねじらず旺盛で、一回に並の男の一人分ぐらつはたいひげたといひとです。世俗のあつとあひゆる歡樂が、ギヨームの生れの田舎となつました。誰ばはかるいとなく慾望をむさだにして生きた男、それがギヨームでした。放蕩者んまごの生活ではありましたが、公人としてのギヨームは決断力と勇氣とに満ち、彼を領主に戴いたアキテームは半世紀近くものあいだ、かつてないほどの繁栄を享受したのです。ギヨームは「イエルサレムでこそ死にたい」と懇つほどの深い信仰があるわけではなかつたのですが、当時のあくの領主の例にもねず、十字軍の遠征隊をひきこして聖地へむかいました。のちに「一一〇一年の民衆十字軍」と呼ばれることになるこの遠征隊の結末は悲惨なものでした。総勢一十万といわれた十字軍兵士のうち、聖地にたどりついたのは、わずか一パーセントにみたなかつたのです。ギヨームの遠征隊が、まさに壊滅しました。十字軍遠征は当時の都城たちの最大のロマンであり、夢であり、冒険でした。しかし、十字軍の夢破れて帰国したギヨームは、十字軍にたどりし、もはやいかなる幻想もいだいてはいませんでした。ただ、アンティオキア滞在中に、ギヨームのなかにねむつていた詩作の才能がよびさされました。聖國したギヨームは、詩作に専念し、のちに、南フランスのトゥルバドゥールとまでたたえられるよひになつます。

トゥルバードウールを祖父として

一一〇〇年ごろから十三世紀末にかけて、南フランスには、オック語の方言で抒情詩を書き、自作の詩を奏でる詩人兼音楽家が続々とあらわれました。トゥルバードウール、つまり、吟遊詩人として知られているかれらの活動は、カタロニアからイタリアへ、さらに、ミンネジングターのドイツを経て、ハンガリーへと広がり、この時代のヨーロッパ文化に少なからぬ影響を及ぼしました。

トゥルバードウールは、ひとどしが見つめることをしばんできた愛の概念を、自由のもとに引きだしました。それまでは、ロゴスにてはべて、ヒロスの愛は、はるかにゆると考へられていましたが、かれらは、男と女のエロチックな、愛を高らかにうたうあげて、ヒロスの愛をほとんじ神秘的な信仰の高さにまでひきあげました。十五世紀になると、近代ヨーロッパの先駆けとして、ルネッサンスの波が全世界をおそいますが、それよりも三世紀もまえに、この愛の奉仕者たちは、こゝさいの街いや羞恥心を捨てて、人間存在の最も根源的な世界を堂々と見つめたのです。

トゥルバードウールの活動の早創期を飾った第一人者が、エレアノールの祖父アキテースのギヨーム九世でした。ギヨームは、徹底した現実主義者でした。彼にとって、女性を愛するといつゝとは、すなわち、肉の快樂を共にする」といふことはませんでした。彼は、精神的な愛よりは、官能的で肉体的な愛の完成を追って求めたのです。

ギヨームの最も人気をほくした詩のひとつに、若者の情事を赤裸々に描寫したものがあります。この若者は巡礼になりすまして、旅をしていました。オーゲルニコのある館で、アンジェレアノールと名の

る一人の姉妹に出会ひ、姉妹の夫たちが留守だとわかると、若者は口の不自由な者のふりをして、詫のわからぬことをモグモグ言いながら、ふたりに近づきます。姉と妹は、若者に食事をあたえ、彼が食事をしていいのあいだ、彼を觀察します。それから、彼が本当に口をきけないことを、さらに確かめようと、彼を裸にして、獣猛な赤毛の猫を彼にたちむかわせます。猫は長いひげで彼をくすぐり、鋭い爪で彼の背中をひつかき、若者の背中は、何本ものみみずばれで真っ赤にふくれあがりました。それでも、若者は泣き声ひとつこわす、若癖と庭席に耐えます。これなら安心じばかり、姉妹は、熱い風呂を用意して、若者を寝室に招じ入れます。

それからの八日間といつもの、若者は、姉妹を相手にベッドのなかで大奮闘し、輝かしい戦果をあげました。若者は、そのときの体験をほいりこぼして語ります。

わたしが、何度もかこんだが、諸君におきかせしよ。

百じ八十八回です。

そんなわけで、わたしの引き具の皮はめぐれ、
装備はすんでのといひで 破れるというだった。

それで得た災難は、擧げるときりがない。

それもこれも、船があまりに大きすぎたためなのです。

ギヨーム流の猥雑で滑稽な詩は、イタリアのボッカチオの『デカメロン』に受けつがれてゆくことになります。

けれども、慎み深さを忘れた直感的で狂熱的な詩ばかりが、ギター曲の十八番ではありませんでした。優雅で、澄んだまことの恋愛詩も多く書いています。そのよのうな詩にして、トルバードホールの芸術の核心が凝縮されています。つやの春の歌には、近代ヨーロッパのあけばなの如き心地がみられます。

新しい季節の心地よれり

木々は葉をつけ、小鳥たむか

それぞれが自分のワントン語で歌ひ

新しい歌の調べに心ねせし

しかしながら、繊細で精神的な輝きを秘めてはいても、また紳士淑女の礼儀作法にのっとって語りれたまつて、肉体的な欲望やエロスをけっして否定しないこと、トルバードホールの恋愛詩の本質があるところによつて。

ある朝のことをまだ憶えていふ、
わたしたちが戦いに終止符を打つて、
あのひとが、かくも大きな贈りもの、
その愛とその指輪をくれた朝。

神よ、わたしを生き永らさせてたまへ
あの人のマントの下に手を差はせる時まへ。

IJのよひな愛の概念は、それまでのロマンチックが理想とした愛の概念とは、まったく異なる性質のものでした。愛する女性との肉の交わりを求めてやまないトウルバードゥールの愛の思想が、教会の教えとまつこいつから対立するものであつたことは、今までありません。しかし、新しい愛の理想をかかげた詩人たちは、女性を単なる欲望の対象とみなして、いたわけではありません。愛に殉じる男たちは、愛する女性に愛を強要したりはしないのです。トウルバードゥールたちは、へんくだつた態度で、つまほしく愛を懇願します。

もし、あの人があの贈りものを下さるなり

それを受け、心から感謝して、

口外することなく、あの人仕へ

お気に召すに話、振る舞つつもり。

男の愛を受け入れるか否かは、ひとえに女の意思にかかるのです。女は、男の快楽のための道具ではないのです。トウルバードゥールの愛の概念には、女性の人格をみどめる人類平等主義的な思想があります。トウルバードゥールの恋愛詩にて、宗教的な氣高さを感じるのは、そのためでしょう。かれらは、人間が生まれながらにして『神

ひれた運命的な欲望を正直にみとめて、それをすこしも恥じず、人間が官能的愛を本来もとめずにはおれない性質であるのを認識したつえで、そこに我を没頭させ、そして、その我をこしれて、さらに高度な理想めざして飛翔しようとすむのです。この魂の高さが、詩のまことの真髓になっています。程度の差や、一コアンスの違いこそあれ、すべてのトウルバードゥールは、この理想のうちに生き、この理想を表現しようとしました。

このよつた新しい愛の概念をつたつた恋愛詩が、無なる土壤から生まれたわけではありません。トウルバードゥールの旋律の宗教的な調子が、ローマ教会の典礼歌や準典礼歌に深く係わっていることを後世のひとびとは発見しています。それに、遊歴詩人たちの奏でる歌謡や民謡などの世俗曲も、トウルバードゥール誕生のための土壤を用意しました。ギヨームの場合、東方遠征で接したムーア人やサラセン人たちの文化からもまた、大きな影響をつけています。

エレアノールは、この祖父と一緒に一度田の妻フイリッパとのあいだでできた娘子ウイリアムを父としました。ギヨームとフイリッパのあいだには、その後五男一女が生まれますが、ギヨームの放蕩は、相も変わらず続き、といつてある年、ギヨームは臣下のシャテルロー子爵夫人をかどわかして同棲を始めます。ダンジュルーズといふ姓をもつこの夫人は、その名のとおり、若く美しく、欲望のおもむくままに生きる危険な女性でした。ギヨームの行為は、当然教会の怒りをかい、ギヨームは破門されます。人妻でありながら、愛人のもとに走ったダンジュルーズには、ギヨームと結婚できる望みはまったくありません。そこで、彼女は画策するのです。シャテルローに残してきた娘のアエノールとギヨームの長子ウイリアムを結婚させて、娘にアキテヌ公爵夫人の地位を得させようとします。彼女の策略は成功し、アエノールはウイリアムの花嫁としてアキテヌにむかえられます。エレアノールは、ウイ

リアムヒアノールを父母ヒュー、エリザベス、ジョンの世に生を受けました。エレアノールとは、わたりどつたのアーノールといふ意味です。

エレアノールは、かわはつで明るく、利発な子で、健康と知性にめぐまれ、父方と母方のよい素質を受けついだようのです。母のアーノールは、祖母のダンジュルーズとは違つて、地味で控えめでした。その娘のエレアノールは、むしろ、祖父母の性質を受けついだようで、エレアノールの血のなかには、ギヨームの冒険心と情熱、そして、ダンジュルーズの美しさと勝氣さと大胆さと、自由へのあこがれが、脈々とながれていました。トゥルバドゥールの第一人者ギヨームを祖父とし、ダンジュルーズを祖母とし、かれらの宫廷で育つたエレアノールがかれらの思想を実人生で実行したとしても、すこしも不思議ではありません。

アキテーヌ公爵家は、代々、ボワトゥー伯爵とガスコーニュ公爵とを兼ねてきました。その領土は、北はロワール川から南はピレネー山脈のふもとまで、東西はオーヴェルニの中央高原から大西洋まで、ギュイエンヌ、ボワトゥー、オーベルニー、ペリゴール、アングーラーム、リムーザン、トゥールーズと現在のフランスの半分ちかくにわたる広大な地域にまたがっていました。今のフランスのほぼ十九洲が、この地域にすっぽりと入ります。領土はロワール川の北部をおさえているノルマンディー公爵家より広く、はるかに肥沃。主君のフランス王の領土のはほぼ三倍。地味はくらべものにならないほど恵み豊かで、ノルマン征服王が冠をいただくブリテン島より、はるかに作物に適した温和な気候の土地でした。この広大な地域に散らばる大小の諸侯たちが、アキテーヌ公爵に主従の誓いをたて、ルートヴィッヒ型の封建組織を形成していました。エレアノールの祖父ギヨーム九世は、「アキテーヌ大帝国の公爵」とよんではばかりませんでした。

運命

エレアノールが十四歳のとき、父が、サンチャゴ・デ・コンポンポステラへ巡礼中に急死し、エレアノールは若くして父の残した所領の主人となり、父の地位を引き継ぎます。父は、最後の息をひきとるまことに主君であるフランス王ルイ六世あてに遺言書をしたため、娘を彼女にふさわしい婿にめあわせてくれるよう指示したのみ、娘とその所領をゆだねます。

カペー王朝の祖ユーグ・カペーが、シャルルマーニュ大帝の最後の生き残り、カロリング王朝のルイ五世を倒したのは、九八七年のことでした。そのときのフランスは、英独仏三国のなかで、王権の最も弱い国でした。臣下の大名のなかには、君主より広大な土地を所有し、より強力な軍隊をもつ者が少なくありませんでした。そのうえ、カペー王朝とカロリング王朝との王権争いは、まだ続いていました。

ネストリア辺境伯または、フランク人の公爵とよばれていたカペー家（カペー家最後の王はフランス革命で処刑されたルイ十六世、最後の王妃はマリー・アントワネット）は、カロリング王朝を倒して、フランス王の座を手にいたものの、その勢力は、パリを中心とするイル・ド・フランスに限られており、事実上、フランスは大諸侯の分立する状態にありました。この状態は、十三世紀まで続きます。

カロリング王朝が、神の塗油によって王権を神授されたのとは対照的に、ユーグ・カペーは、同等の位の貴族たちに擁立されて王となつたために、当初から、王室としての威儀と尊厳を欠いていました。

はじめの数世代は、王位を父から子へと譲り渡すのがせいにいっぽで、王家としての権力を強めようとか、威儀を高めようとか、あるいは、領土を広げようとかの野心を抱く余裕はない、父親が生きているあいだは、息子に王位を譲り、諸侯に臣従の礼をとらせ、世襲制を確立してゆくだけで勢いいっぱいだった。

封建社会の領主は王に臣従の礼をとら、配下の諸侯たちは領王に臣従の礼をとりました。そして、その諸侯たちは、配下の騎士たちが臣従の誓いをたてました。このように、まるでクモの巣のように国にすみすみにまで広められた田舎の誓いにより、ペリッシュ型の封建国家が形成されていました。力のある者と力のない者とは、誓いという約束事によって手を結び、義務を果たし、そして、自分の権利を守ったのです。

貴族たちに雍されて王になつたとはいえ、サミニコエルがダビデを塗油したという旧約聖書の故事にならつて、教會から正式に王として聖別されたカペー王家でありますから、代々の王には、配下の諸侯を制する権利があたえられていました。反乱や権力の乱用が生じた場合、軍隊を派遣して鎮圧し、国内を平定するのは、王家の義務でした。だが、カペー王朝の力は、のちの太陽といわれたルイ十四世の王朝とくらべると、微々たるものです。直接の支配権は、王の領地にかぎられ、ほかの領地にたいしては、反乱でもおきないかぎり、王権を発動することは、まづできませんでした。ルイ六世の時代になつて、やつと、パリとオルレアンのあいだのモンレーリー要塞の直接支配権を手に入れましたが、そのとき、王は、「闇じ」められた牢獄から救いだされでもした「かのよつに狂喜」といわれています。

王領の貧弱さにくらべて、ハレアーノールが継いだ領土は、広大なものでした。しかも、力があり、名豪ぞろいの大小の貴族たちが、アキテース公に臣従の誓いをたて公爵家を支えていました。

アキテームの王は、ふじい題でおおわれ、アキテームの王は、一年中、甘こかおりが漂つてゐる。ヨーロッパの森で、あらゆる種類のぐだものがふんだんに実り、森のみどりは色濃く、ゆたかな牧草地では、みじまとて胆えた家畜が草を食んでおり、海岸線にめぐまれ、大西洋に面した港町は繁榮し、さまざまの国の船が出入りしていました。ボルドーは、はやくから壇とワインの輸出港として知られ、またスペインよりのベイジヨンヌ港は、捕鯨船でにぎわっていました。肥沃な土地の領主にふさわしく、アキテーム公爵家は歴代のフランス王よりも贅沢な暮らしをしていました。

このフランス一豊かで広い領地を手に入れて、カペー王朝を名乗とともにヨーロッパの名だたる王家にするには、カペー王朝一五〇年の悲願でした。それが、ギヨーム十世の急死によつて、思ひがけなくも達せられよつとしているわけですから、ルイ六世がエレアノールをほかの男性にわたすわけはありません。そのへんのことは、エレアノールの父ギヨーム十世もしつかりと計算にいれています。アキテームの後継者の婿として未来のフランス王ほどふさわしい人物はいないと、その思惑もあり、ルイ六世は、ほかでもないわが子、フランスの皇太子をエレアノールの婿に選びます。

皇太子とエレアノールが結婚すれば、婚賀として、アキテーム領がルイのふといふに無償でしげがつてんぢへる、一滴の血も流さず、平和のうちに、しかも法的に正しへ、おまけに皇太子ルイは、「世界の薔薇」と恋愛詩のなかで歌われているほどの都く美しに妃をむかえることになるのだ。皇太子が王となつたあつつきには、神聖ローマ帝国皇帝に劣らぬ、富と権力と幸福を享受するであつて、父が息子にあたふる贈り物のなかで、これほど大きなものがあつつか。

皇太子ルイは、ルイ六世の次男として生まれました。兄のフランシスは、活達で、まさしく王になるべく生まれたよりなりしょく賢い少年でした。兄が、豪胆で強い騎士にならための教育を受けているあいだ、弟のルイは、僧院に入るべく修道院で育てられていきました。ルイは口数が少なく、ちこさこときから、じつと思索したり読書に夢中になつていゐるほつが多く、修道院での生活は、いのちづな内氣な彼の性格じぶつたり合ひでござりました。きびしい修業も戒律も、少しも苦にはなりませんでした。神に獻身する生き方こそ自分にあたえられた天命と信じていました。そして、精進にあけくれ静かで平和な日々をおくりでござりました。それが、ある日、何のまづふれもなく、父王から富廷によびもどされたのです。そして、父のあとを繼いでフランス王になる運命になりましたことを知り、ひれました。兄フランシスが落馬し、急死したのです。

南フランスのトゥルバドゥールの富廷で育つたエレアノールと修道士のようなルイとの結婚がひとのよつた結果をもむかえるかな、陽の日を見ゆるよつあきらかでした。ふたりのあつだには、王女が一人生まれますが、一一五一年に離婚します。ふたりの性格の違いが主な原因だったのですが、性格のまつたく反対の組み合わせば、当時の政略結婚ではじへらつたのだとしたから、これは表向きの原因にはなりませんでした。ふたりで赴いた第一回の十字軍遠征（一一四七—一四九年）がまったくの失敗に終わつたこと、結婚して十六年にもなるのにふたりが、男子の世継ぎに恵まれなかつたことなども、離婚のおおやけの原因とされています。しかし、離婚（実際には、結婚の解消）を言ひだし、ルイに離婚を迫つたのは、じつはエレアノールでした。当時、離婚できる場合もありました。当事者たゞ、とくに妻のまつた姦通の罪が証明された場合など、夫と妻が「結婚禁止親等」にあると証明された場合でした。前者の場合、夫も妻とともに再婚できません。エレアノールは、アキテーム家とカペー王朝の家系の詳

細に調べた結果、ルイとエレアノールが血族関係、しかも「結婚禁止親等」内にあることを発見し、それを盾に離婚をせましたのでした。

別れ

百年もまえにとかの昔の話なのですが、ルイの四世代まえの祖先、ロベール敬虔王（九七〇年～一〇三一年）は、エレアノールの五世代まえの祖先にあたりました。つまり、ルイとエレアノールは四親等と五親等のあいだがらにあつたのです。アキテームのギヨーム八世と結婚したロベール王の孫娘のヒルダガードが、エレアノールの曾祖母にあたります。

ローマの民法によると、父と娘は一親等にあります。兄と妹、祖父と孫娘は、二親等、叔父と姪は、三親等といいます。同じ士官、四親等のあいだがらにあり、「四親等」いないの血族間の結婚は禁じられていました。それいじょうに離れた血族間の結婚が、正当なものと判断されていました。教会法は、もともとローマ民法の数えかたに従つていました。八世紀前半に一度、ローマで開かれた宗教會議は、ことじ同士の結婚を禁じて止んだだけです。ところが、九世紀の前半ころになりますと、結婚禁止親等の範囲が、四親等から七親等にひろげられ、数えかたも変わります。共通の祖先にたどりつくまで、一世代ずつさかのぼって数える方法が採用されます。この数えかたによりますと、娘と父は一親等、娘と祖父は二親等、娘と曾祖父は三親等、とさかのぼってこつて共通の祖先にたどりつくまで、数えてゆきます。そして、当事者同志が七親等になつてゐるまでは、その結婚は近親相姦と認定されました。

それで、ルイとエレアノールのばあいのようじ、王の側近でさえ気がつかなかつたほど血が離れていた結婚でさえ、その正当性がうつたがわれることになるわけです。これが近親相姦だとするならば、ヨーロッパの貴族階級全員が、その罪を犯して「たどりつけ」になります。

わらうひとつの王冠

一一五年三月三十日 金曜日 オルレアン近くのボージャンシーにあるルイの城には、フランスの高位聖職者たちが、続々とつめかけてきました。サンスの大司教によつて召集された宗教会議は、ルイとエレアノールをまえにして、ふたりの親族関係を確認し、ふたりの結婚が無効であることを宣言しました。二人の王女は、王の嫡皇子と認定され、親権はルイに下されられました。

エレアノールの出した条件は、アキテース公領の回復と、エレアノールが臣下としての義務を怠りないかぎりは再婚にルイが異議を唱えないこととの、二つでした。

翌日、土曜日、エレアノールは、ルイとその重臣たちに別れを告げ、一路ボワチエに向かいました。

ボージャンシー宗教会議からほほ八週間後の、五月十八日、サン・ピエール大聖堂の鐘がたからかに鳴り響きました。元フランス王妃、エレアノールが、ノルマンディー公爵夫人、そしてアンジューとメーヌの伯爵夫人となつたことを、世界中に告げる鐘の音でした。

この知らせに一番驚き、怒ったのは、ルイでした。エレアノールの変わり身のはやさにも仰天しましたが、エレ

アノールが、カペー王朝の不眞戴天の敵、アンジュー家のヘンリーを夫に選んだからでした。

アンジュー家は、アキテーヌ公家と縁無き間柄ではありませんでした。エレアノールの父ギヨーム十世は、一度ならずヘンリーの父ジョフロワと一緒に戦を交えていました。ジョフロワがノルマンディー進攻を企てたときば、ギヨームは、いかばやくジョフロワに味方し、ノルマンディーめざして進軍していくています。ジョフロワは、氣むすかしい父ギヨームの数少ない友人のひとりでした。

がつしりとして均整のとれた体格、美しい面立ち、激しい気性、冒險好きでありながら、根は実際家、文芸への造詣、祈る人よりは戦う騎士としての素質、アンジュー家とアキテーヌ家とは、さもありまなんでも、よく似ていました。エレアノールは再婚の相手に、ルイとはまったく正反対の男性を選んだのです。

ヘンリーは、最近、叔父であるスコットランド王から騎士に叙せられたばかりで、騎士としての素質に磨きがかかる、そのためか、落ち着きと自信にみちあふれています。生まれたときから、イングランド王になるべく帝王学をみつちりしきまれたせいか、すでに王の威儀すら備わっていました。美貌どころでない、父にはるかにおびませんでしたが、がつしりとした体格は、父よりひとまわりも大きく、生命力にみちあふれていました。肩幅が広く、厚みのある胸、聖地の最前線で戦つ、テンブル騎士団や聖ヨハネ騎士団の騎士たちのようだ、太い腕、農夫のように大きく、力強いとした手。肩までたれた赤いまきげ、灰色の大きな目は、燃える二個の弾丸のようだらんらんと輝き、眼孔から、火の粉がとびだしているようでした。野性味と優雅な物腰と知的なきらめきとが、奇妙に混じりあい、不思議な魅力をかもし出していました。

父ジョフロワは、ヘンリーがエレアノールにちかづくことをかたく禁じていました。主君フランス王の妃だから

であります。むつと特別の理由もあつました。ジョフロワが王家の家令をつとめていたときには、王妃をその胸に抱いたことがあるからだと云つたのでした。しかし、ヘンリーは父とは別のモラルをもつていていたのです。王妃が父の愛人だったところにはござりません、王室の妃にちかづくことがなぜわるいのか。現に、ルイの父、ルイ六世はルイの母ベルトを城砦に閉じこめ、アンジュー伯妃のベルトリードを奪つて彼女と結ばれたではないか。エレアノールの祖父ギヨーム九世とタンジュルーズとの恋愛事件も、いまだに語りつがれていました。ヘンリーは、行動する若者でした。欲しいと思ったものは、なんでも手に入れました。それが、かれの冒険であり、生きがいでした。当時、若い騎士のあいだでは、主君の奥方に精神的愛（ときには肉体的な愛）を捧げ、奥方を主君から奪つかたちの姦通恋愛遊戯が流行していました。騎士が愛を捧げるのに、王妃ほどにふさわしい女性がいるでしょうか。恋敵として、一国の王とあらやつぱりの冒険がこの世にあるのでしょうか。ヘンリーには、ルイ六世やギヨーム九世となるじ情熱の血が流れています。

エレアノールとヘンリーは、出立ったその瞬間から、互にのなかに同じ熱い血がかよっているのを確認したはずです。ヘンリーとの出来事は、修道士のよつなルイとす「」した、寒々としてあじけない夜をつづべて埋めあわせしてくれるのはじに情熱に満ちてこたのであります。エレアノールは、ルイを捨て、ヘンリーを選びます。

ヘンリーとエレアノールとのあいだには、十一歳の年齢のひらきがあります。しかし、政略結婚に年の差は、たいた問題ではありません。併せて、ヘンリーの母マティルダ（イングランズ王ヘンリー一世のひとつ娘）は、父のジョフロワより十五歳も年上でしたが、イングランズの王冠ヒノルマントリーの宗主権という莫大な財産をジョフロワにめたりしました。ヘンリーは、エレアノールと結婚する少しもえに、父の急死により、これらの所領の

相続人となつておつましたから、相続した土地に自分の領地アンジューを加え、つまり、Hレアノールのアキテーヌを加えれば、ヨーロッパの大帝国が出現するはずでした。フランスの王冠を放棄したHレアノールにひとくち、ヘンリーほど再婚の相手にふさわしい人はいなかつたでしょ。それに、このときのHレアノールは三十歳でしたから、世継ぎを産む可能性は十分ありました。

年の差を除けば、一度目の結婚のほうが、はるかにHレアノールの理想に近づいています。強く逞しく、未来ある高貴な夫を得て、Hレアノールは、初めて結婚の幸せを味わいました。あまりに幸せだったので、神聖な気持ちさえし、いきとし生けるものにたいして、信じがたいようなやさしさを覚えたのでしょうか。よろこびとともにわかちあつてもうつたまひ、Hレアノールは、領地内のいくつかの修道院で、これまでになく大きな寄進をしていました。結婚直後の五月二十六日には、モンティエルヌフをわざわざ訪れ、曾祖父の時代から修道院に上り下りされていた諸特権を拡大し、翌日、サン・マクシオンにゆき、同じでも、沢山の寄進をしています。寄進田録にて、Hレアノールはこう記載しています。

「Hレアノール 神の御めぐみにより、アキテーム、およびノルマンディーの公妃となり、ノルマンディー公アンジュー伯ヘンリーに婚姻によつて結ばれたる者」と。

この田録にて、Hレアノールはいつも書っています。「わたしがフランス王妃であつたとき、王は修道院にセーヴル・シイド森を寄進、わたしもそれに同意しました。それから、わたしは、教会の判断により、王のもとを去りました。そのとき、この森はふたたびわたしの所領となりました。ですが、賢きおん方々のおすすめに従い、ベネロ大修道院長の懇願もあって、最初のときほんの少しだけも同意したこの森を、いまは、心からのよがいびをもつて

贈ります……しまや、わたしは結婚によってヘンリー、ノルマンナイー公 アンジュー伯と結婚されました」

エレアノールは、フォントブロー大修道院には、特別多額の寄進をしました。この女子大修道院長は、ヘンリイの叔母のマティルダでした。エレアノールは、そのときの寄進回録につきのよひを記しています。

「血族結婚という理由によつて、夫ルイのもとを去り、おとに高貴なるわが夫ヘンリー、アンジュー伯爵にて結婚によつて結びつけられて、神聖な靈感がわたしを導き、フォントブローのこ女たちの聖なる集いを訪れたいとの願いをわたしに抱かしめました。神のお恵みにより、わたしは、この意図を理解できました。いつもして、神のお導きにより、わたしはフォントブローにまいりました。姉妹たちが集まる館のしきいをまたぎ、この深い感動して、わが父や祖先が、神とフォントブロー教会に与えたすべての特権をあらためて献納いたします。わいど、ポワトゥーの貴族で五百スターの贈り物をさしあげます」

ヘンリーと結婚したエレアノールは、アンジュー家の根拠地アンジューに移り住みます。多くの高位聖職者や学者を生んだアンジューは、学術的で落ち着いた都でした。その都は、エレアノールの一行為移つてみると、こっぴに華やかになりました。

ゆつたりと流れるマイエンヌ川の豊かな水面に、木々の緑が映え、じんもりとした森の縁に抱かれるよつてして、修道院や教会が建つてあります。エロイーズを育てたロンスレイ修道院は、マイエンヌ川のむじつにあり、そのともも、知的で学問好きな女たちを育ててきました。

ロワール川は、マイエンヌ川とアンジューで交差しており、四方に流れる川は、アンジューに水の都のおもむきを示えていました。文化的水準の高い都でありながら、いかめしい雰囲気が少しもなく、訪れる者の心をなしませてく

れます。自然の恵み豊かな田園の風情のせいでどうか、「ひとたび、この町に入れば、我を忘れてしまつほどの美しい町」と、たたえられていました。

王の直轄下にあるフランスは、第一回十字軍失敗の痛手からまだ立直つておらず、田畠も人民も、いつも続く飢饉や戦闘のために疲弊しきっていました。家臣はおろか、領地、爵位、官職、荘園までも売りはらつて遠征軍に加わった諸侯の宫廷からは、詩人や芸人、芸術家、年代記作者、放浪の学僧や学者たちが、吐き出されていました。かれらは、パンを得ることができ才能を發揮できる場所を求め、さまよっていました。エレアノールの去つたカペー王朝の宫廷には、かれらを受け入れる力はもはやなかつたのです。

エレアノールの宫廷だけが、ヨーロッパの文化の粋を集めて、天空の道しるべの星の「」とく、燐然と輝いていました。放浪の学僧や詩人たちに、トゥルバードゥール、ギヨーム九世の血をひくエレアノールは、強い牽引力を持つていました。かれらは、野を越え山を越え、アンジェールにやつてきました。

若く、美しく、富裕で自由を愛するアンジュー伯妃を、詩人たちは「西にござる王朝の北極星」と讃えました。エレアノールの宫廷は、ふたたび吟遊詩人や、小糸で軽薄な若い騎士たちでにぎわつたのです。

ルイの宫廷で度しく過ぎた長い年月を、一拳ことじもどすかのよいし、エレアノールは、宫廷文化を花開かせることに情熱を傾けます。くすぶりつけた文芸への熱い想いと才能は、奔流のよつてエレアノールのなかからほとばしりでした。パリで培つた学問への造詣と東方の都で吸収したヘレニズムとサラセン文化とが、南仏の詩歌の世界に融合され、独特的の典雅で香り高い文化が築きあげられました。パリ、「コンスタンティノープル、アンティオキア、シチリア、ローマと、キリスト教の最高位の帝都に滞在するあいだに、エレアノールは、天才的な能力で、

それぞれの文化の粹を吸収していったのです。それが、幸福な結婚を得て、一気に花開いたのでした。祖父ギヨーム九世をしのぐ宫廷文化が誕生しました。

エレアノールの宮廷に集まってきた多くのトゥルバードウールのなかで、ベルナール・ド・ヴァンタドウールのエレアノールの栄光とともに、後世しまで伝わることになりました。ベルナールがエレアノールの宮廷にはじめて姿を見せたときのことを見て、吟遊詩人の年伝記作者レイノーラルは、つぎのように記しています。

「彼（ベルナール）はワムーザンを去り、ノルマンディー公妃のもとへやつてきた。公妃は若く、大変に力のあるお方で、勇氣と名譽を理解され、そういうことを讃える歌を望まれた。公妃は、ベルナールの歌を気にいられた。ベルナールを真心をこめて歓迎された。ベルナールは、長いあいだ、公妃の宮廷にとどまり、公妃に思慕を抱き、公妃を讃える歌を多く作った。公妃も彼を愛された」

エレアノールの宮廷にきてからも、ヴァンタドールは数々の傑作を作りました。なかでも、オック語抒情詩の「雲雀が空はたぐのを見るとき」は、ポワトゥーの調べとして、名曲をかちえました。

陽の光を浴びて　ひばり
喜びのために羽ばたき舞い上がり
やがて心に拓がる甘美の感覚に
われを忘れて薄れる姿を見るとき
ああ、どれほど羨ましく思ふことか

恋の喜びに耽る人々の姿が。

その一瞬で、この胸が欲望のために
破れなければ不思議なくらいだ。

ああ、恋に詳しい自分だと思つていたのに
何ど知らぬことが多かつたとかー

愛して甲斐のないひとを

なお愛ひずこはいられないのだから。

あのひとは私の心を、私自身を、金世界を
取り上げてしまい、私から逃れ去る、
いつこすくてを取りあげたあと
欲望と羨望に燃えた心だけを残して

(新倉俊一訳)

森羅万象の移りやすさ はかなさをしづかに哀しむ彼の詩は、聴衆から感動の涙をさせました。

ベルナルルもまた、同時代のトゥルバ・カールと同じく、情熱の贊美歌を意中の貴婦人に捧げています。「磁
気をおびた人」、「力づけ」、「みるだに美しいひと」などと題した愛の詩を作りました。この詩を捧げられた貴婦人

の如は明らかにされていません。意中の貴婦人の如は、詩人の心の宝として心中深く秘めておくのが習わしだったからです。しかし、ベルナールにとつて、いや、當時の多くのトウルバードゥールにとつて、Hレアーノールが「磁氣をおびたひと」であったことは、たしかです。ベルナールは、Hレアーノールに「高貴にして、やせしく、「誠実にして、真摯」、「いかなる王にも王冠の輝きをそえる女性」、「典雅にして美しく、魅力そのもの」と惜しみない贅辞を捧げています。

Hレアーノールの宫廷にみちみちでいたのは、廢の詩ばかりではありますでした。アーサー王ロマンスを記述するブリタニアの物語作家、放浪詩人、ノルマンやアンジューの年代記作家、学者、それに巡礼路をはすれた巡礼たちまでもが、宫廷を訪れております。

文芸の女王として南フランスに転歸し、詩人たちとの廻の戯れに身をゆだねてゐるHレアーノールからば、まばゆいばかりの輝きがあふれ出でてきました。Hレアーノールにとつては、あれにて黃金の口々でした。その裏の盛りのところ、Hレアーノールは、王のよつた男の子を産みおとします。一一五二年、八月一七日のことでした。

フランス王妃だったときは、あれほど望んでも得られなかつた男の子が、ヘンリーと結婚して一年足らずで、恵まれたのです。Hレアーノールは、この男の子をギヨームと名づけます。アキテーム公爵家の長子にして、代々Hレアーノールを名づけました。そして、早々に、ギヨームをボワトゥー伯領の正式の相続者としました。「アキテームの女主人」であることを、此時も忘れたことのなHレアーノールでした。

H子ギヨームの誕生は、母の王の勢いのアンジュー家に勢いに勢いをつくることになりました。占星家たちは、それがつて、ギヨームの誕生を、星の運行がすべて、アンジュー家の味方をしたことをの表れとみなしました。

長子ギヨームは、わずか三歳にして、一五六六年病死しますが、同じ年の六月、幼い命を引き継ぐかのよう、娘女マティルダがロンドンで誕生します。プランタジネット王朝の花嫁は、この後も精力的に子どもを産み続け、後継者作りに貢献します。一五七年、九月八日、のちに獅子心王と呼ばれるようになるリチャードをオックスフォードの宮殿で産み、一一五八年九月三日四男ジョンをロウを、一一六一年九月二日エレアノールを、一一六五年十月ジョンをアンジョールで、一一六六年二月十七日には、ふたたびオックスフォードで、末子、のちに父地王と呼ばれるヨーハンを産みました。

ハンマーと鉄床

結婚してから十年あまりのヘンリーとエレアノールを、ひとつの目標に向かつて作動するハンマーと鉄床にたとえた歴史家がいます。ヘンリーとエレアノールの野望は完全に一致していました。一人の夢は、征服と遺産相続によって得た所領を土台にヨーロッパーの王国を築くことでした。諸侯の持つ自世的な権力を、王権の配下に置き、一大中央集権国家を築きあげることでした。そのためには、王権を国のすみずみにまで浸透させ、軍事力を王のもとに集中させ、強力な國家をつくりなければなりません。それを可能ならしめる一大車輪が、ヘンリーとエレアノールだったのです。ヘンリーは、エレアノールの力を必要としていました。支配欲は、エレアノールの天性でした。ヘンリーとともにイングランドを統治するとこう立場は、長つあいだ眠っていた彼女の政治的才覚をめざめさせました。

イングランドの王位についたヘンリーとエレアノールに、即初課せられた仕事は、先の王スティーヴン時代の無政府状態に終止符を打つ、国家に秩序と平安をもたらすことにでした。奪われたノルマン王家の権利や特権も、取り戻さなければならず、このような実務的な仕事にたいしては、ヘンリーは天才的能力を発揮しました。エレアノールもまた、領内に秩序を回復し、法の正義を施行するために、勢力的に動き回りました。そして、クリスマスと復活祭には、ワインチャスター、ワリングフォード、ノッティンガム、オックスフォード、リソカン、マルボローなど、ヘンリーに合流しました。ヘンリーお気に入りの森の宮殿や、クラレンンドンやウッドストック、ブリストルやピーターフォードの大好きな狩りを楽しむ王のそばにも、エレアノールの姿がありました。エレアノールの存在は、プラントジネジー王朝の勝利と栄光を象徴していました。

ヘンリーとエレアノールにとって、一一五五年から、一一六五年にかけての十年間は、ひたすら権力を強め、領土を拡張する、まさに前進と繁栄の時期でした。ヨーロッパの西の地図は書きを変えられ、力の均衡の変化は、ひどいとの運命を変えました。ハンマーと鉄床でついであがられた、プラントジネジー王朝の勢いは、じぶんといふを知りませんでした。ふたりの乗り込んだ無敵艦隊は、世界の敵をむいりこまわしてもかくともしませんでした。だが、上昇したものは、かならず下降する。ひとも王国も、無限のかなたに飛翔することはできない。それが、自然の「」とねつて、「」のやじゅう。そして、運命の車輪の下降は、血らの車輪の腐食とともに始めるものです。ヘンリーとエレアノールとして、この自然のことわざから無縫ではござりませぬでした。

麗つわロサムンド

ジョンが生まれるとまもなく、ヘンリーとエレアノールは、別居生活に入ります。

ヘンリーには、幾人かの寵姫がありました。だいたい、いつも戯れ程度で終わっていました。だが、ロザムンドだけは、これまでと違っていました。ヘンリーは、ロザムンドを真剣に愛していました。

一六六六年のクリスマス、エレアノールは臨盆のお腹をかかえて、英仏海峡を渡り、ロンドンに着くと、ウッジドックの別荘に急ぎました。噂どおり、ヘンリーの新しい恋人は、王妃のようにして暮らしていました。王妃の権限を用いて、ロザムンドをウッジドックから追いで出すことができましたが、国王の愛人を追い出すことにためらひをおくべ、そのかわり、愛人とおなじようにもむことは拒絶して、エレアノールはいつもたかと伴の者たちを連れて、オックスフォードちかくのボーモント城に移り、この城で、その年もおわいかく、十一月十七日、ジョンを産みました。

世界の薔薇と驕がれた若き日の美しさを、エレアノールは「まだに失わずに」としました。王妃としての年月は、その美しさに気留をとていていました。だが、九人の子どもを生みあげ、四十の坂を越えたエレアノールです。褐色の髪と白い肌、おおいかぐくもありません。彼女だけで、自然の時の歩みから無縁でこられたのがなかつたのですから。ロザムンドは、ヘンリー好みの、色白でまっそとした美しい少女でした。最初の出産にからロザムンドの死まで、十一年あまつ、ヘンリーは、「王侯貴族がけつしき抱へるのやせなことひりしき被造物」と歌われたロザムンドをけつして離しませんでした。

ロザムンドの死後、彼女の死因をめぐつてさまざまな憶測が流れ、まことに伝えられていました。

一説によりますと、ヘンリーがイングランドを離れているあいだに、エレアノールが迷路の謎を解き、隠れ家へ侵入して彼女を殺したといわれています。ヘンリーがロザムンドに用意した刺しゅう用の綿糸が針箱からもれ、交替のために退出した騎士にからまる綿糸のはしづき、エレアノールが見つけ、逆にそれをたぐつてゆき、彼女の部屋をつきとめた。ロザムンドの部屋にはこのと、エレアノールは、彼女に迫ったところなのです。毒を飲んで死ぬか短剣でのどを突いて死ぬかと、美したことおなじく、黙滅あるロザムンドは、毒じみの死をとらんだということです。また、べつの言い伝えによると、王妃はロザムンドを裸にして、火せめにし、それから胸に一匹のひきがえるをさせたといふ、ひきがえむば、ロザムンドの生き血を吸い、ロザムンドの血がたらりと流れるたびに、王妃はけたたましい笑いをあげたところです。

このような言い伝えから、嫉妬に狂う壮絶な王妃の姿が浮かびあがってきます。おなじくのむかし、王妃と熾烈な戦いに入ったヘンリーの側が、流したものでしょ。

若く美しい夫の愛人に、嫉妬をおぼえたのは、たしかでしょ。それで、ヘンリーがウーハーールズに遠征し、ロザムンドに出会つたといふ、エレアノールは、アンジェやブレトン人とボワチエ人の反乱鎮圧に苦慮していました。このよつなどきに、夫が若い女性と戯れていたのですから、エレアノールが、夫の行状をこころよく思ひはずはないません。だが、エレアノールはロザムンドに手だしはしなかつたと思います。それに、手だしをするまえに、エレアノールは、いともたちを父に背かせたといつ理由で夫に軟禁されていましたから、物理的に不可能でした。ヘンリーは、エレアノールの侍女や女官にかたはしから手をつけました。ヘンリーが臣下の屋敷や所領に足を踏

みいれるや、奥方や娘たちは、私室にどじいめられ、王のまえに姿をあらわす」とを禁じられました。美しい女性を見ると、わがものにしないでおれない性質だったのです。ヘンリーの庶子一人を受け入れ、宮殿で育てたと同じように、ヘンリーの女性問題も、結婚の当初から日常生活の一部でした。それに、エレアノールはトウルバドゥー、ギヨーム九世の孫娘です。不義や姦通をたからかに歌いあげた恋愛詩のなかで育ちました。エレアノールの祖母ダンジュールーズは、当時最も名を馳せた姫婦のひとりでした。エレアノールが、夫の愛人の存在を知ったとて、彼女を毒殺するほど、とりみだすわけがなかつたでしょ? エレアノールは、ヘンリーがベケット(のちのカンタベリー大司教)に夢中になり、一転して異常な憎しみを抱きはじめたときのように、ロザムンドの一件についても、むしろひややかにながめていました。ただ、麗しきロザムンドの登場が、ヘンリーとの別れを早めたことは確かでした。

ヘンリーと結婚してから、第七子誕生まで、エレアノールは、毎年のよひいじともを産み続けました。フランスに残してきた二人の娘を入れると、九人のいじもを産んだことになります。人一倍健康な彼女は、出産によって体力を消耗するところなどありませんでした。一人産むことに、生きる活力を新たに得て、健康になっていきました。多くの子の母親であることは、なにもかえがたい人生の幸せでした。出産と育児は、彼女に大きなよろこびをもたらしました。

だが、出産と育児が彼女の人生の目的になつたことは一度もありません。エレアノールが最も欲したこと、それは、國と人との支配するところでした。彼女にとって、王妃になることは、王の共同統治者になることを意味したのです。だから、エレアノールは、王冠を欲したのです。フランスの王妃だったときも、イングランドの王妃になつ

てからも、一度として儀礼的、象徴的役割に満足したことはありませんでした。ヘンリーは、当初、混戦時のイングランドを平定し大陸の所領を統一するのには、ハーラノールの力を必要としていました。だが、アンジュー帝国が一応の形をととのえないと、政治にたち入る王妃の存在をいつひへ思つよいになつたのです。しかも、一つの国にて、二つの王冠はこひない。由マティルダのひいひー、イジヤを座み置く、王国の土台を築いたあとでは、表舞台からしつやせ、尼僧院でしずかな余生をおくればこそこのだよ。

ヘンリーは、じだいに、王妃を玉座からおねむかひになつておきます。そして、ひこで、彼女がこよなく愛したウッズストックに田舎娘ロザムンドを囲じ、ハーラノールを侮辱しました。たいていの王妃なら、変わつてしまつた状況を受け入れ、静かに尼僧院にひきこむのでありますよ。しかし、このよつな運命は、ハーラノールの理もといひではあつませんでした。彼女には、まだまだ表舞台で活躍つただけの体力と氣力がありました。それだけた辱めに対抗するだけの財力も精神力もありました。

フランスの王冠を捨てたとき、アキテームの領主としての地位が彼女を待つてこまつた。どのよつなどきにせよ、彼女には、アキテームとこつ壁のべき故郷がありました。

イングランド王が、アキテーム出身の王妃を辱めたとき、アキテームのひとびとハーラノールの利害は一致します。外国人の王に支配された臣民をしのんできたアキテーム人たちは、こまゝそ不當な王に對して立ちあがるとれだと感じます。そして、ハーラノールのなかで、ひとつ夢が、じだいにふくらみ、形をひとのえてゆきました。エレアノールは、ジョンを生んだ年の十一月、ノルマントイへおけて出帆しました。ハーラノールの身のまわりの傭兵や家財道具をのせた船は、七隻にもなりました。ヘンリーが生きてこらがきり、一興ひイングランドの土を

踏まな」との王妃の決意が、この大移動にはあらわれていました。エレアノールが去つてから、ヘンリーは思い知るやうに、ハンマーには鉄床が必要であり、車は片輪だけでは動かぬことを。

アーガンタンドひかれた一六七年のクリスマス宮廷のあと、エレアノールは、しばらく自分の所領に落ち着いたいとの希望をヘンリーに述べ、ポワチエにむかいました。自分の道をゆくための、静かな別離でした。

エレアノールは四十四歳になつていました。当時の平均寿命は三十歳に越していました。女は三十になると老年のみなされていました。世界の薔薇と讃えられてひとびとを魅了したこのおもかげを、まだに残し、美しさを保つてはいましたが、時は彼女にも、その腐食の魔の手をのばしていました。マンシヨー家の若き獅子ヘンリーを誘惑したこの、成熟した女性の魔力は失われていました。ヘンリーは、女としてのエレアノールも、共同統治者としてのエレアノールも必要としてはいません。王妃の威厳は傷つけられていました。それなのに、彼のもとにこりまつて、いかなる意味がありまじや。夫と別れて、我が道をゆかなければならぬ。わが道とは、おのれの力で人と領土と、そして、国を動かすことです。

ヘンリーとベケットとの確執から、エレアノールは学んでいました。ヘンリーのもとをたち去るとともに、ひとを構えてはならないことを。胸にしつかりと抱いて、ある計画を実現せんために、静かにたち去りねばならない。さもないと、自滅する。ベケットが招いたはねかえり（ヘンリーは四人の刺客にベケットを暗殺させた）は、避けねばならないのでした。

表向され、アキテース領内の不穏な動きを抑えるところとして、ポワチエへ帰る許可をヘンリーからとりつけました。じじつ、ヘンリーの支配を快く思わないアキテースの貴族たちは、たえまなく、反乱を企て、ヘンリーを悩

まつりにこまつた。ヘンリーよつば、エレアーホールのせつが、かれらを手なすける術を心得てこます。しかば
ポワチエに帰還するにあたつて、領土内の貴族や民衆、エレアーホールが王と別れて、帰つてくるのだとしての印象を
少しだけはなつませんでした。エレアーホールは、ヘンリーが必ずから護衛隊を指揮して、彼女をポワチエま
でおへつじゆけぬまま向けました。ポワチエへ向かひエレアーホールの心からは、かつての同志、ヘンリーの存在
はあとかたもなく消えていました。かつてヘンリーとエレアーホールは、同じ目的へむかって作動するハンマーと鉄
床にたどえられました。ふたりは、力をあわせて、みじかとアングルー大帝国をつくつあげました。だが、これから
は、この帝国を、みずから手で壊さなければならぬのです。息子たちのために、そひ、自分には、野望を話す
ひとのやうなやうじよじもたちがいる。いじもたちの内にして生きてゆく道があ。巷のひとびとの期待をつ
いきつ、エレアーホールが、ロザマンドを毒殺などしませんでした。女への復讐など、エレアーホールの者のおよぶ
といふではないのです。わたしは王妃、復讐は政治で返す。自分の所領内から、政治を自分の手で動かしてみせん。
その政策が、いかにヘンリーの政策に敵対するかが、きっと歴史が証明してくれる。

エレアーホールは、大陸の自分の所領をアンジュー王家から切り離し、いじもたちにいたるのことを考へてこました。
そのためには、いじもたち、元、フランス王にたつて、臣従の礼をひき受けなければなりません、まだ、アキテーヌの女公
として、王妃自身、ルイに臣従の礼をひく立場にありました。イングランドの王位は、ヘンリー王子が継ぐであ
り、だが、ポワチエは、歴代のアキテーヌ公家の跡をひき承るのリチャード王位に継がせたい。

イングランド王妃、エレアーホールが、ポワチエで王位をうつすむなど、ルイとヘンリーの立場は微妙に変
化してきます。

ヘンリーとエレアノールが別居生活に入つたらしいとの噂は、ルイの耳にも届きます。無視するのできない問題でした。エレアノールがイングランドから身をひいたいとは、ルイにとって、アンジュー帝国の根元をゆるがす絶好の機会でした。

エレアノールの意向を確認したルイは、積極的に動きはじめます。まず、ルイはヘンリーに、大陸の所領を三人の息子に分けるよつこと提案しました。そして、大陸の領土にたいし、息子たちに、臣従の礼をとりせむよつこと言いました。この条件をのむなら、ヘンリーが喉から手が出るほど欲しがつていゐるヴィクセンから手を引くこともよいと言いました。それに、ルイは、一番田の妻とのあいだにできた九歳のアトリエード姫をベリー伯領とともにリチャード王子にやつともよごといふ条件まで出します。ちょうど自分の田の黒づわにヘンリー王子に王位を継がせ、また大陸の所領を三人の息子たちに確保したこと願つていたヘンリーは、この提案にびつきます。ヘンリーに有利にみえながら、ルイの提案は、じつは、父と子のあいだにくさびを入れて父子の結束をくずす意図を秘めています。ヘンリーはそれが見抜けませんでした。彼は、直義的で、物事の裏をみぬけない男でした。

ヘンリーは、分割は形式上のことで、実権は自分にあるものと考えておました。ルイのときのヘンリーは、まだ三十五歳の男盛りでした。兎も生えそろつていしない息子たちに実権を渡すことなど、はじめからヘンリーの念頭にはなかつたのです。だが、ルイは、ヘンリーの誤算がありました。息子たちの背後にいるエレアノールの存在に気づいていなかつたのです。形式の上とはこゝ、三人の王子たちはそれぞれ領土を譲られ、それにたいしフランス王に臣従の誓いをしました。ルイのことは、事実です。とすれば、王子たちの所領の宗主権は、父のヘンリーにではなく、ルイにあります。ルイは計算していました。形式を盾に、エレアノールが、息子たちにかわって、ヘンリーに

実権の譲渡を要求するであつた。

ヘンリーと結婚してから十五年ほどあっただは、ふたりのあいだには、ロマンスの主人公たちのように、情熱じよべるものがあつました。そして、ふたりで手をひつあつて、アンジュー帝国建設といつ法外な武勇の冒險に挑戦しました。しかし、ヘンリーは、エレアノールとの創造的でダイナミックな一人三脚を、とかく放棄してしまいます。ヘンリーは創造より情欲を選んだからです。そして、ロザムンドといつ田舎娘を、自分のしどねにひきずりこみました。このとき、ヘンリーとの愛の冒險は終わったのです。妻が去ったあとに、武勇だけが残りました。ヘンリーと別れたのか、エレアノールはただひとり、「白い雄鹿」を求めて、冒險の旅に出たのでした。エレアノールの一人旅は、フランタジネット王朝から大陸の所領を引き離し、フランス王国に返還すると、この結果を招きます。この結果にエレアノールは悲しまなかつたと、わたしは思っています。エレアノールがピレネーの回りから連れてきた孫娘のエレアノール姫が、前夫ルイの孫息子、フランス皇太子の花嫁となり、のちに、エレアノールが脱いだフランスの王冠を「戴く」とになるのですから。いつも、半世紀前にルイにたいして犯した罪の償いをすることができるのであるのですから。

石井美樹子著『王妃エレアノール——一世紀ルネッサンスの華』は、一九九四年朝日新聞社からペーパーバックが再出版されました。